

神戸大学 広報誌 [kaze]

Kobe University Public Relations Magazine

Jul.2017

Vol.09

風

特集1 海洋底探査センター「鬼界カルデラプロジェクト」

巨大カルデラ噴火の予測に挑む世界初の研究

特集2 神大研究スームアップ

進化の視点から人間社会を読み解く



特集1 海洋底探査センター「鬼界カルデラプロジェクト」 巨大カルデラ噴火の 予測に挑む世界初の研究

「日本全土で1億人以上が絶命または生活基盤を失い、国が失われるような火山噴火が、明日にも起こるかもしれない」、にわかには信じがたいその可能性を科学的に立証し、破局的な噴火の予測を試みる研究、それが海洋底探査センターの「鬼界カルデラプロジェクト」だ。鬼界カルデラとは、九州南方の海底に広がる直径約20キロメートルのカルデラで、約7300年前に超巨大噴火を起こし、九州南部の縄文文化を滅ぼしたと言われている。この火山について、世界初の高精度イメージングとモニタリングに挑む異好幸センター長に、研究の現状とプロジェクトの意義についてお話を聞いた。

76年ぶり 戦前に手放された絵画の里帰り



神戸大学を訪れたエンゲル夫妻と娘の摩耶ちゃん

神戸大学出光佐三記念六甲台講堂の壁画「雄図（ゆうと）」の習作がアメリカで見つかり、このほど76年ぶりの里帰りを果たした。本作品は、神戸生まれで旧制神戸高等商業学校（現神戸大）卒業生の洋画家・中山正實氏（1898－1979年）が、壁画制作に向けて1937年頃に描いた下絵の油彩画であり、馬にまたがり高く険しい山々を越えようとする勇猛果敢な青年たちが生き生きと描かれている（縦66.5cm、横42.5cm）。制作当初は東京のアトリエで保管されていたとみられるが、太平洋戦争開戦直前の1941年秋に、「国益の為」との理由で不本意にも手放すこととなり、その際、中山氏は「愛惜」の気持ちを込めて、次のメッセージを作品の裏面に書き残した。

「この作品、国益の為とて今、吾が画房を離る。愛惜に不堪（たえず）。私益のために転々して、報国の雄図を忘るること勿（なか）れ。安住の所を得れば即（すなわ）ち吾（われ）に報せよ。」

入手した人があれば自分に知らせて欲しいと訴えている。だが、生前の中山氏がこの絵に再び出会うことはなかった。中山氏は多数の作品を残しながらも生前ほとんど売らなかったと聞くと、主に日中戦争から太平洋戦争にかけての美術界では、積極的に国への作品の献納が行われており、意に反して手放さざるを得なかったのかもしれない。日本絵画の歴史を知る上でも本作品は貴重であろう。

その後の経緯は不詳だが、2007年頃、ニューヨークにおいて本作品をインターネットオークションで購入した美術商のクリス・エンゲル氏は、裏面のメッセージに気付く。妻の理佐氏に読んでもらい中山氏の気持ちを知ったクリス氏は、リビングに飾った絵を見ながら何とか彼の遺志をかなえたいと思うようになる。そして、中山氏の母校であり壁画本作の所在地である神戸大学に寄贈を申し入れた。2017年6月26日、学長室を訪れたエンゲル夫妻と娘の摩耶ちゃんの3人に武田学長から感謝状が贈呈され、クリス氏は「絵を戻すことが自分の責務だと強く感じていた。ぜひ多くの人に見てもらいたい。」と満面に笑みを浮かべた。

（大学文書史料室長補佐 野邑理栄子）

■ Contents

【特集1】 巨大カルデラ噴火の予測に挑む世界初の研究	03
【特集2 神大研究ズームアップ】 進化の視点から人間社会を読み解く	08
【神大生の挑戦】 60年途絶えることなく続く無料法律相談	12
【KOBЕ教育】 神戸グローバルチャレンジプログラム	14
【キラリ神大 OG・OB】 旭化成ホームズ株式会社 設計課長	16
【こんにちは!留学生です】 韓国からの留学生	18
【神大発地球】 Table For Two―神戸大学プロジェクト	20
【国際ニュース】 「アラムナイ」	22
【Mini News】 「神大プロフェッショナル」	23

表紙写真： 鬼界カルデラの観測船として活躍する海事科学研究科附属練習船「深江丸」 カメラ：大亀 京助

鬼界カルデラの海底探査で 活動的巨大大溶岩ドームを確認



鬼界カルデラにおいて、海洋底探査センターでは昨年10月と今年3月の2回、合わせて25日間に及ぶ観測航海を行った。海軍科学研究所附属練習船「深江丸」に最新の観測機器を搭載し、観測船として活用した初の航海の結果、巨大大溶岩ドームの存在が確認された。その意味するところは…。

**いつ起きても不思議ではない
超巨大噴火を予測する**

——鬼界カルデラの探査に取り組む理由は何？

海洋底探査センターは、海洋立国を支える技術開発や人材育成を進めるための一連の改革の中で、平成27年10月に設置されました。しかし一方で、「巨大カルデラ噴火を何とかし

なければならぬ」という危機感に對して、神戸大学で何ができるかを考えた結果、このセンターを作ったという側面もあります。

巨大カルデラ噴火とは、カルデラの形成を伴う巨大噴火のことで、日本でも最も直近に発生したポイントが鬼界カルデラです。巨大カルデラ噴火が起ると、通常の山体噴火とは比較できないほど大規模な火砕流が発生するほか、広範囲に数十センチもの火山灰が降り積もり、人間の生活環境を長期にわたって破壊する危険性が高い。仮にいま、九州中部で発生すると、最悪1億人以上が死亡または生活不能に陥ると予測されます。そして、過去の発生頻度を統計学的に解析した結果、私たちは「日



本列島で今後100年間に巨大カルデラ噴火が起る確率は約1%」と発表しました。この確率は、阪神・淡路大震災発生前日における30年発生確率と同程度。つまり、いつ起こっても不思議ではないのです。

——それほどの危険が、世間ではほとんど認識されていません。

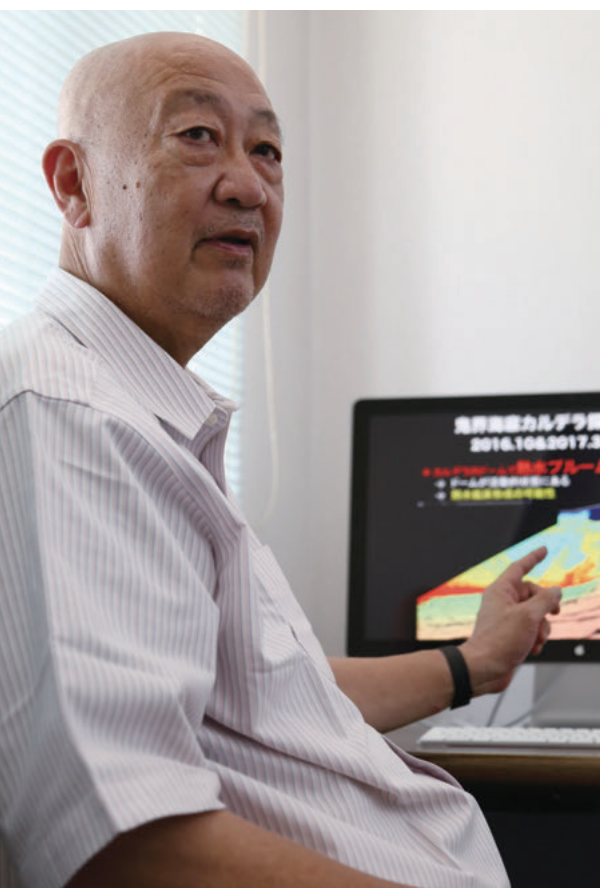
火山噴火予知連絡会の藤井敏嗣前会長も内閣府の委員会で言及されていましたが、行政サイドとしては「起こるかどうかわからないものに対策は取れない」として、これまでずっと放置されてきました。その結果、何の対策も、適正な観測研究も成されていません。ただ、これは日本だけの問題ではありません。そもそも、大規模噴火が起こるといふことは、地下にマグマ溜まりがあるわけですが、その存在をイメージング

の結果として証明した例は、世界中に1件もないのです。

——イメージングとは？

CTスキャンで地下を探索することと比べてください。例えば、熱がある、腫れが見られるといった所見からの間接的な病気の診断と、CTスキャンで病変を確認した上での診断には大きな違いがあります。今のところ、マグマ溜まりの存在は間接的に示されているだけなのです。

そこで、私たちはCT探査でマグマ溜まりの位置や大きさを正確にイメージングし、継続的なモニタリングを行う探査を鬼界カルデラで試んでいます。そこからマグマ溜まりの成因や巨大カルデラ噴火の発生メカニズム、前兆現象の解明など、噴火予測につながるデータを集めます。



理学研究科 教授
海洋底探査センター センター長

巽 好幸 TATSUMI Yoshiyuki

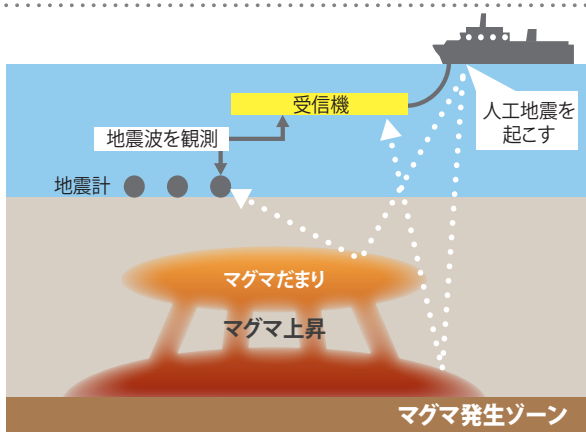
1954年、大阪府生まれ。京都大学理学部卒業、東京大学大学院理学系研究科博士後期課程修了。英マンチェスター大学研究員、京都大学大学院理学研究科教授、東京大学海洋研究所教授、海洋研究開発機構（JAMSTEC）地球内部ダイナミクス領域プログラムディレクターなどを経て、2012年より神戸大学大学院理学研究科教授、2015年10月より海洋底探査センター長。専門はマグマ学。

interviewee

——「世界初」の意味がわかりました。

アメリカ中西部のイエローストーンでもマグマ溜まりのイメージングが行われていますが、観測精度が低く、詳細なモニタリングができません。火山のイメージングには地震波を利用しますが、イエローストーンでは自然地震を利用するため、精度が上がらないのです。観測精度を上げるためには、任意に人工地震を起こして、マグマ溜まりを通ず地震波の数を増やす必要がありますが、これを陸上で行うことは現実的に不可能です。なぜなら、人工地震探査は広いエリアでたくさんの人工地震を起こして観測する必要がありますが、周辺の市街地への影響など、さまざまな問題があるからです。

ところが、海中の火山が対象なら、それが可能になる。漁業関係者



との調整さえクリアすれば、広範囲に船を走らせ、縦横無尽に人工地震を起こして観測できる。そして、神戸大学には「深江丸」がある。こうした理由から、私たちは海をターゲットに設定しました。そして、将来的に必要な陸上での人工地震探査を実現する手法や技術の開発も、プロジェクトの目標の一つと考えています。

**鬼界カルデラの精密探査で
世界最大級の溶岩ドームを確認**

——観測航海の成果は？

最も重要な成果は、海底の詳細な地形がわかったことです。第1回観測航海では、カルデラ内の隆起地形の内部構造や成因を明らかにするた



interview

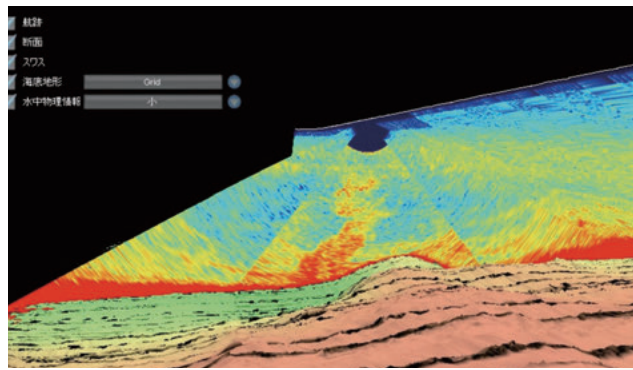
センター長 巽先生に聞く

めのデータを、海底の地形を精密に測定できるマルチナロービーム音響測探装置や、人工地震を用いて地下の断層を測定できる反射法地震探査装置を使って収集しました。また、第2回観測航海では遠隔操作型水中ロボット「SHINDAI-2K」で海底を撮影・観察しました。

その結果、隆起地形が直径約10キロメートルの巨大溶岩ドームであること、その一部で火山性とみられるガスの気泡や熱水ブルームが発生していることを確認し、このドームが比較的最近に形成され、現在も活動的であることがわかりました。

——鬼界カルデラの中に巨大な火山が生まれていると？

そうです。鬼界カルデラの前回噴火は7300年前。それ以降に、この溶岩ドームの体積分、単純計算で約40立方キロメートルものマグマを噴いたことになりました。40立方キロメートルという規模は、例えば始良カルデラ（鹿児島）の中にできた溶岩ドームである桜島の約3倍。検証が必要ですが、世界最大の溶岩ドームと言えるでしょう。それだけのものが、わずか7300年の間にできたわけで、このペースは日本の他の火山に比べ数値が1桁高く、すごいスピードです。つまり、火山活動が異様に活発だと言えます。



マルチナロービーム音響探査で熱水ブルームを確認(赤い部分)

(JOGMEC)と共有できており、将来の資源探査につながる可能性もあります。

——今後の探査、研究の方針は？

先の航海で得られたデータの解析を進めるとともに、探査ポイントを増やすため、次の観測航海を10月と来年3月に行います。鬼界カルデラのイメージングはまだ途上です。マグマ溜まりは恐らく深さ10キロメートルほどに位置しているので、その深さまで正確にイメージングしなければなりません、その成因を調べるためには深さ30キロメートルまで

練習船「深江丸」が最新鋭の観測船として活躍

Kobe Ocean-Bottom Exploration Center

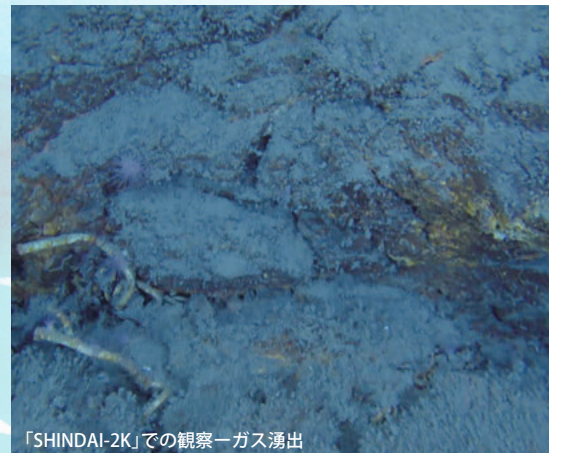
の人工地震探査が必要です。神戸大学だけではとてもできないほど大がかりな探査になるので、包括連携協定を結んでいる海洋研究開発機構(JAMSTEC)と共同で進めていければと思っています。深江丸での探査と並行して、浅い所ではダイバーに潜ってもらう予定です。モニタリングも含め、探査はエンドレスに続きますが、基礎データを積み上げて実証しながら、長期的な予測につなげていきます。

——人材育成については？

鬼界カルデラの観測航海には、大学院生数名と、他大学からの志願者も参加しました。深江丸ほどの観測装置を備えて海洋探査の実習ができる船は、いま日本の大学にはありません。本学の理学研究科では、今年から深江丸での海洋探査実習を必修にしましたが、他大学からの実習受け入れも始めています。人材育成な

——巨大カルデラ噴火との関係は？

それはまだわかりません。なぜなら、40立方キロメートルのマグマがマグマ溜まりから出たことで、巨大噴火はもう起こらない可能性もあるからです。しかし、ドームの下にはまだ多量のマグマがあり、その一部が上昇しただけと考えることもできます。今回の観測航海では、ドームから岩石サンプルも採取しました。その分析を含め、収集データを解析する必要があります。



「SHINDAI-2K」での観察一ガス湧出

しに海洋立国は具体化しませんし、そのためには研究も進めて、学生に魅力を感じてもらわなければなりません。教育と研究の双方に力を入れていくことが大学の役割です。

その一環として、高知大学海洋コア総合研究センターと連携する協定を結びました。また、京都大学防災研究所の桜島火山観測所とも協定を結びます。彼らが鬼界カルデラ北縁の薩摩硫黄島に持っている観測拠点と、私たちが海底に設置した地震計などのデータを共有することは、相互の研究において大きなメリットとなります。さらに、JOGMECとも包括連携協定を結び、鬼界カルデラの鉱床評価を進めていきます。

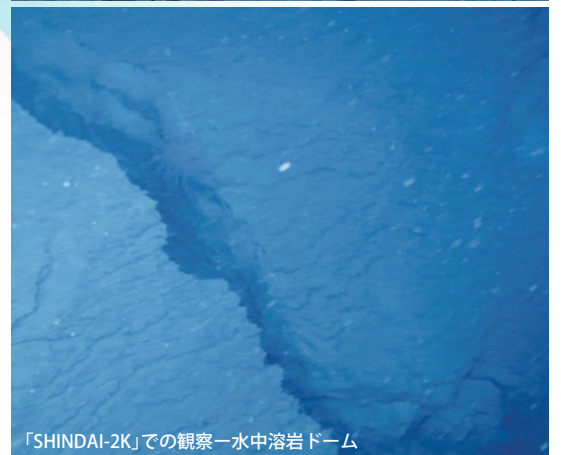
——最後に、巨大カルデラ噴火を予測する意義は？

巨大カルデラ噴火は破局的な被害をもたらすので、「起きてしまえば終わり、予測しても仕方がない」という意見もあります。しかし、本当にそれでいいのか？これは私たち科学者が決める問題ではありません。噴

鉱床評価と人材育成 海洋立国を具体化する取り組み

——噴火予測以外の研究は？

熱水鉱床の評価です。先の観測航海で確認した熱水ブルームには、金属鉱床の成分が含まれている可能性があります。日本はかつて銅や銀の産出国で、特に「黒鉱鉱床」の存在は世界的に有名でした。黒鉱とは垂鉛や鉛、銅、銀などの多様な金属を高濃度で含む鉱石で、海底のカルデラ内部で形成されたことはわかっています。そのプロセスはわかっています。鬼界カルデラにおける熱水ブルームの確認が、鉱床形成のプロセスを解析する第一歩になるかもしれません。この研究の重要性は石油天然ガス・金属鉱物資源機構

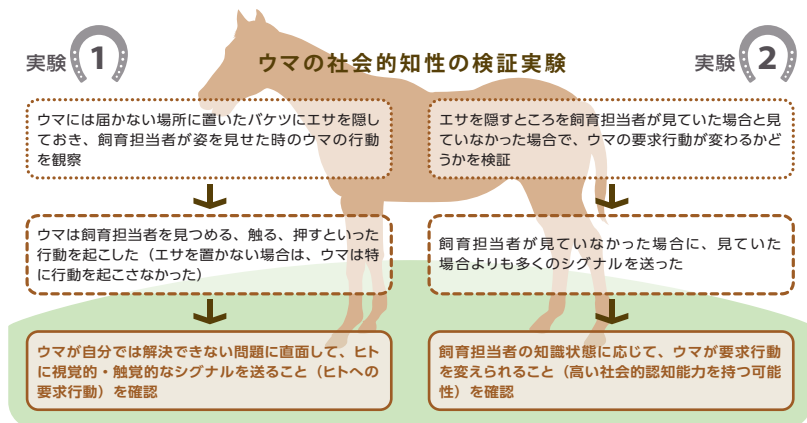


「SHINDAI-2K」での観察一水中溶岩ドーム

火が起きた場合の災害規模や、噴火を予測するための手段を示すところまでが科学者の仕事で、そこから先は日本人全員が決めることです。しかし、危険性が正しく理解されれば、ある種の国家プロジェクトが動く可能性はありますし、その時に役立てられる基礎データを持つておくことは極めて重要です。巨大カルデラ噴火への対策を進めるためには、行政関係者だけでなく、世の中全体の理解を高める必要があります。そのために、研究成果を広くアピールしていきたいですね。



鬼界カルデラ「第2回探査航海」乗船スタッフ



家畜化されることで、動物の知性が高まる？

—— グローバル社会の課題解決と
いったテーマを扱う国際文化学研究
科において、山本先生の生物学的な
研究は異色に見えます。

国際文化学研究科がカバーする領
域は非常に広く、例えば国際政治学
から私の取り組む心理学や比較認知
科学まで、多様な研究が行われてい
ます。私はヒトとヒト以外の動物を
比較することで、「ヒトとは何か」
という人間の本质を明らかにする研
究を中心に進めており、そこから現
代社会で起きているさまざまな問題
について、「進化」の視点から解決
に結びつけていくような知見を得た
と考えています。



「ウマは人の心を理解していた」、
こんな見出しの記事がこの春、新
聞各紙に掲載された。国際文化学
研究科の山本真也准教授と学術研
究員のリングホーファー萌奈美さ
んが、ウマの「社会的知性」を調
べる実験を行い、ウマが人の心を
読むことを科学的に検証したと紹
介している。その実験とは、ウマ
が自力では取れない場所にエサを
置き、そこに人（飼育担当者）が
姿を見せた場合のウマの行動を観
察するもので、結果として、ウマ
が人に助けを求めること、また、
その人がエサの存在を知っている
場合と知らない場合では行動を変
えることが確認された。人とのコ
ミュニケーションにおけるウマの
知性を明らかにするこうした研究
が、「現代社会の課題解決という
グローバルなテーマに結びついて
いく」と話す山本准教授にお話を
伺った。

—— 先生は霊長類の研究で有名です
が、ウマに取り組まれた理由は？

これまでは主に、チンパンジー
やボノボの認知能力を調べること
で、ヒトの知性がどのように進化
してきたのかを研究してきました
。特に、利他行動や互惠性、他
者理解といった「社会の中で発揮
される知性＝社会的知性」に関心
を持っています。

この分野で近年、イヌの研究が非
常に進んできていて、イヌがヒトと
のコミュニケーションにおいて、高
い社会的知性を持つことが明らか
になってきました。例えばヒトのジ
ェスチャーや表情、ヒトが置かれた状
態を理解する能力が高いということ
ですが、こうした能力は「家畜化」
の過程で発達したのではないかと考
えられているのです。ところが、同
じ家畜であるウマについては、社会
的知性の科学的検証はほとんど行わ
れていません。

イヌとウマでは本来の生態的地位
が全く違います。捕食動物のイヌに
対してウマは被食動物であり、イヌ
は狩猟の同伴、ウマは農耕や運搬の
役割を担うといったように、家畜化
の過程も全く異なります。こうした
違いが、どういった知性の進化に関
係しているのか、そこを調べていこ
うと思っています。

interviewee

山本 真也

YAMAMOTO Shinya

国際文化学研究科准教授

1981年奈良県生まれ。2004年京都大学理学部卒業。2006年京都大学
大学院理学研究科生物科学専攻修士課程修了。2009年京都大学大学院
理学研究科生物科学専攻博士後期課程修了。博士（理学）。2010年京
都大学霊長類研究所ボノボ（林原）研究部門特定助教を経て2013年よ
り現職（京都大学野生動物研究センター特任准教授を兼務）。専門は
比較認知科学ほか。

人間は自らを家畜化した？

—— ウマの研究が、どのようにヒト
の研究に結びつくのですか？

ヒトの知性の進化を語る際に、
「自己家畜化」という考え方が広く
用いられるようになっていきます。こ
こでいう自己家畜化とは、「自ら攻
撃性を抑えて、他の個体と仲良く
やっていけるよう、自分自身を飼い
慣らされた動物のようにする」と
いった意味です。この自己家畜化の
プロセスを経たことが、ヒトがこれ
ほど社会的な動物となり、協力的な
社会を築けるようになった最大の要
因ではないかという考え方が、近
年、有力視されてきています。

この見方を検証する上で、家畜化
のプロセスを経たイヌやウマなどの
動物の知性を調べることが有効だと
考えています。ブライアン・ヘアー
という研究者は、イヌとオオカミを
比較する研究を行い、イヌの方が社
会的知性に長けていることをさまざ
まな実験によって実証し、家畜化が
知性の進化に大きく影響したことを
明らかにしました。それでは、ウマ
の場合はどうなのか。イヌとは違う家
畜化のプロセスを経たウマで、ど
のような知性が進化してきたのかを調
べ、比較することで、ヒトの知性の進
化に対する理解も深まるはずです。

進化の視点から人間社会を読み解く

Zoom-up
ボイス



国際文化科学研究科
グローバル文化専攻 学術研究員
リングホーファー 萌奈美
RING HOFER Monamie
2014年5月、東京大学大学院総合文化研究科博士課程
広域科学専攻修了

山本先生と一緒にウマの社会的知性に関する仮説を立て、それを実証するための実験を任せていただきました。他の伴侶動物とは違う、ウマならではの社会的知性を明らかにするための実験手順を、試行錯誤しながら組み立てました。子供の頃からウマが好きで、長年接してきた経験が役立ったと思います。



実験には神戸大学馬術部のウマ8頭とその飼育を担当する学生の皆さんが協力してくれましたが、私たちの仮説や実験の目的は伝えずに参加してもらいました。目的を知っていると、無意識の動きがウマに影響を与えてしまう可能性があるからです。実験からはある程度、仮説通りの結果が得られましたが、想定とは逆になった部分もあります。それは実験2で、飼育担当者がエサの存在を知っている場合の方がウマの要求行動が多くなると予想していたんです。「知っているのに、どうしてくれないの?」と。結果は逆になりましたが、それはそれで面白い成果なんです。

次の実験では、人が求めていることをウマが理解して行動できるかを確かめたいと考えています。また、野生のウマの研究も進めており、昨年からポルトガルで、京都大学のグループと協力してフィールドを立ち上げています。実験による認知研究と野生本来の観察研究を並行して進めていくことで、まだわかっていないことの多いウマの知性を明らかにしていきたいと考えています。



自然下の情報と、飼育下での認知研究を組み合わせる手法が、山本准教授の研究チームの特徴。フィールドワークはギニア共和国、コンゴ民主共和国のほか、ポルトガルや台湾、ブータン王国などでも行っている。
撮影：山本真也

築いていることがわかります。私は「要求に応じるチンパンジー、自発的に助けるヒト」という2種の違いを明らかにしました。チンパンジーは「求められれば」他者を助けるが、自ら進んで助けることはしない、一方でヒトは自発的に他者を手助けする動物であり、それがヒトをヒトたらしめる特徴だと考えています。人間が築いている協力的な社会においては、他者への「共感」によって互いに助け合う互恵性だけでなく、「評判」を聞いて、あるいは評判を気にするから協力が成立するという間接互恵性も見られます。こうした社会は人間に特有のものではないか、チンパンジーとの比較研究から私たちはそう考え始めています。共感する心や協力行動が、どうい

環境で進化し、どういうメカニズムで起こるのかを明らかにすることが、人間が築くべき社会像や、協力社会を維持するために必要なシステムの解明といったテーマにつながっていくと考えています。ここ数百年の文明社会は急激な変化の連続です。そこについていけない「心」の存在が、さまざまな社会問題や心の病の原因になっている。それらを解決できないのは、そもそもヒトの心というものがきちんと理解できていないからです。その理解が欠けている部分を、700万年かけてヒトの心が進化してきたプロセスを明らかにする研究によって埋めていきたい。遠回りかもしれませんが、じっくり取り組んでいきたいと思っています。



「ヒトとは何か」、動物との比較から解明

—— 霊長類とも比較を? ——
そうですね。チンパンジーやボノボはヒトに最も近い動物、いわば進化の隣人です。一方、ウマやイヌは進化の系統から見れば遠いけれど、ヒトとの社会的な結びつきが非常に強い伴侶動物です。「ヒトとは何か」というテーマを探索する上で、進化の隣人であるチンパンジーやボノボの研究は、ヒトの系統とチンパンジーの系統が分かれてから、どのような進化を経て今のヒトが誕生したのかを明らかにする上で重要です。また、伴侶動物であるウマやイヌの研究は、家畜化による知性の発達プロセスを知る上で学術的な意義を持つものと言えます。
今回行ったウマの実験でも、チンパンジーやイヌとは違う結果が出ています。自力では取れない場所にエサがあるとき、ウマは人にシグナルを送る要求行動を見せましたが、エサの「場所」を人に伝えようとする行動は確認できなかったと解釈しています。同様の実験をチンパンジーやイヌで行うと、人とエサを交互に見比べたりして、「どこ」という情報を伝えてくるんです。ウマの場合はそうした行動が出てこなかったこと自体が、家畜化のプロセスの違いや、ウマ独自の知性の発現かもしれません。

—— ヒトの心はどう進化したか ——
霊長類の研究からわかってきていることは?
チンパンジーとボノボが属するパン(Pan)属とヒトの系統が分かれたのが約700万年前、チンパンジーとボノボが分かれたのが約100万年前と言われています。つまり、チンパンジーとボノボはとても近い種なのですが、チンパンジーの作る社会は競争的で争いごとが多く、ボノボの社会は平和共存的であるなど、両者にはかなり違う点が多い。その違いがどこからきているのかを明らかにする研究が、今すごく注目されています。そして、ボノボが平和的な社会を築いているのは、ヒトが経た自己家畜化と同様の過程を経たからではないか、その点がチンパンジーとの違いを生み出したのではないかと考えられています。
一方、ヒトについてはボノボとチンパンジーとも共通点が多く、それだけ複雑な動物であると言えます。ヒトは協力的な社会を築く一方で戦争もするので、行動の起源をチンパンジー的な社会にもボノボ的な社会にも求めることができます。かつてはチンパンジーとヒトの間だけで比較研究が進められてきましたが、今世紀に入ってそこにボノボが

加わり、ストーリーが複雑になってきました。それだけ多様な知見が得られるので、ボノボの研究はますます重要になってきています。
—— 具体的な研究方法は? ——
フィールドワークと、今回のウマの実験のような認知研究の組み合わせを重視しています。実験だけでなく、その動物が本来築いている社会の中での自然な行動にも目を向けたいと、進化の過程を理解することはできません。フィールドワークから得られる自然下の情報と、飼育下での認知研究からの知見を組み合わせ、複数の種で比較する研究方法が、私たちの研究チームの特徴です。
チンパンジーについてはギニア共和国、ボノボについてはコンゴ民主共和国でフィールドワークを行っており、大学の授業のない春休みと夏休みは、だいたい海外に出ています。コンゴでは新しいフィールドサイトを開拓中ですが、これまでは首都からセスナ機で5時間、さらにオートバイで4時間もかかる奥地で調査を行ってきました。だいたい1〜2カ月単位で現地調査を行っています。
—— 人間社会についてのお考えは? ——
チンパンジーの社会を通して見ると、ヒトがある意味で特殊な社会を

60年途絶えることなく続く無料法律相談

法律相談部 部長——法学部法律学科3年

高野 由奈

TAKANO Yuna



法律相談部は、法学部の2〜4年生約60人からなる部活。昭和32年に部が創立されてから60年にわたり、無料の法律相談会を続けてきました。今回は、部長の高野由奈さんにお話をお聞きます。

——無料法律相談会について教えてください。

私たち法律相談部では、テスト期間や年末年始などを除き、毎週土曜日に神戸市内で相談会を開催しています。また、それ以外に、近隣の他府県での「出張相談会」や、近畿圏外の都市での「移動相談会」も行っています。相談の流れとしては、まず受付で相談者の方から概要を伺い、一度控室に持ち帰って、数名の部員で内容を検討します。相談者の方が何を求めているのかを確認し、みんなでのような回答や提案ができるかを考えます。回答をお伝えすることで、相談者の方がどんな疑問を持たれるかも予想し、ご説明できるよう用意した上で、回答をお伝えしています。

——どのような相談が多く寄せられますか？

相続や離婚など、家族関係に関する相談が多いです。相続について言うと、配偶者・兄弟間の分配に関する相談もありますし、借金などのマイナスの遺産がある場合に、どうすれば良いのかといった相談もあります。最近では、インターネットなどを利用して、ご自身である程度調べた上で、本当に合っているか確認して欲しいという方もよくいらっしゃいます。

——難しい相談もありますか？

相続や離婚については、相談会を重ねる毎にノウハウが蓄積されていくので、比較的对応がしやすいのですが、珍しい内容の相談や、行政に関係する相談などは、回答が難しい場合もあります。

行政関係の相談というのは、例えば、建物を建てる時に、区域によって規制がある場合があります。そういった場合に、行政への可否の確認がうまく行かなかったり、納得できなかったりといった内容です。これは、色々な条文をまたいで判断する必要があったり、大学の授業で取り上げられない条文を確認する必要があったりするので、解釈が難しいことがあります。相談者の方をあまりお待たせする訳にもいきませんので、ある程度これで間違いはないだろうというところまで検討して回答を始めるのですが、回答をしている間も、控室ではずっと検討を続けていたりもします。一度用意した回答に本当に間違いがないか、もっと適切な提案ができないか、常に必死です。

また、相談会が終わった後は、部員みんなで相談内容の検討会を行います。一度回答が終わった相談でも、必ず後で本当に正しい回答ができたのか、他の方法はなかったのか意見を言い合うことを大切にしています。検討会の結果、誤ったことをお伝えしてしまっていた場合や、より良い提案が見つかった場合は、相談者の方の後からご連絡することもあります。ときには法曹関係のお仕事をされているOB・OGの方が参加して、細かく

確認してくださることもあり、とても勉強になります。

——相談会のために、普段どのように法律の勉強をされていますか？

授業で勉強したことがそのまま役に立つこともありますが、法律相談部では、1年生向けに、4月から翌年1月頃まで、テスト期間や長期休暇を除きほぼ毎週、勉強会を開催しています。法律相談部に興味のある1年生は、この勉強会に参加してくれる人が多く、2年生になったら正式に入室します。

入室してからは、夏休みに集中的に勉強会をしたり、年に2回の他大学との討論会に参加したりします。討論会では、課題に関係する条文の勉強から始めて、回答や質疑応答の用意するのに1カ月以上かかります。

——入室したきっかけを教えてください。

私の場合は、相談会の見学に行って、世の中にはこんな問題があるんだなというのを知り、興味深いと思ったのがきっかけです。他にも、相談に対応する先輩の姿に憧れてだったり、将来弁護士や法曹関係の仕事に就きたいと考えて、授業だけでは得られない実践の場を求めて入室した人もいますね。

——やりがいを感じる時や、嬉しいと思うのはどんな時ですか？

相談者の方と直接やりとりをするので、目の前で「なるほど」と納得してもらえたり、「そんな制度を知らなかった、ありがとう」というような反応をもらえるのと、嬉しいですね。

また、回答の内容は同じであっても、相談者の方の立場によって、どうお伝えすると、より納得していただけるのか、会話のテクニックのようなものも必要になってきます。相談者の方に不利な内容をお伝えしないといけない場合もありますが、嫌なお気持ちにならないように上手にお話を遮りながら、法律上はどうなっているのか



神戸市立総合福祉センターにて定例無料法律相談を開催



1年生向けの法律勉強会風景



法律相談部の部員メンバー



神戸大学 法律相談部 —— 定例相談会 ——

- 日時：毎週土曜日 14時～15時半
- 会場：神戸市立総合福祉センター
神戸市中央区橋通3丁目4-1

※お盆や年末年始、合宿などの事情でお休みを頂く場合もございます。
お越しの際は必ず相談部HPの相談会日程および相談に関する注意事項をご確認ください。

法律相談部
<http://home.kobe-u.com/kobehoso/index.html>

るまで、じっくりお話を聞かせることができます。また、斡旋のようなことは一切ありませんし、本当に気軽に来ていただきたいと思っています。プロの弁護士さんに相談するかどうか迷っている時や、ちょっと気になることがあるから聞いてみよう、くらいの気持ちで、是非お越しいただきたいなと思います。

Student's Voice

チャレンジプログラムを履修して
左から小濱くん、谷口さん、西田くん、田中さん



ボランティアチャレンジ(ラオス) 西田 優希 理学部 惑星学科 2年

ラオスの小学校を訪問し、青少年活動を行うコースに参加しました。もともと、発展途上国に行ってみたいと思っていて、参加を決めました。

ラオスの小学校では、日本で言う「体育」や「図画工作」といった授業を行っていません。子どもたちに、体を動かすことや折り紙を教えたりしながら、現地の教育を学びました。他にも、教育省を訪問したり、ラオス国立大学の文学部日本語学科の学生と交流したり、現地の国際協力機構(JICA)で算数教育に携わっている卒業生の方を訪問したりもしました。

小学校での最終日に、子どもたちをチームに分けて、運動会をしようと企画しました。これまでの活動でうまく行かなかった点も考えて準備したのですが、いざ始めてみると、「チーム」という考え方がよく分からなかったようで、何人も勝手に別のチームに行ってしまうということがありました。やはり国によって、独自の考え方や価値観があり、それが自分たちとは全く違うことがあるのだということを、忘れずに行動しないといけないと実感しました。

このコースでは、普通では得られない刺激をたくさん受けることができました。先進国も面白いと思いますが、まだあまり発展していないような国にもっと行き、いろんなことを学んでみたいと思うようになりました。



小学校の運動会風景

フィールドワークチャレンジ(タイ) 小濱 直大 経営学部経営学科 2年

現地で働いている日本人の方に、タイで働くことが実際どういう風なのかお話を聞け、将来を考える上で、とても勉強になりました。このようなプログラムで、海外で数週間を過ごすのは、本当に良い経験になります。興味のある方は、時間が許すのであれば、是非参加してみたいです。

フィールドワークチャレンジ(タイ) 田中 葉月 経営学部経営学科 3年



コーヒー農園での清掃活動

私が参加したコースは、タイで「食の安全／食のルーツ」をテーマにフィールドワークをするものでした。以前、家族旅行で訪れた際にタイが好きになったことと、食事を大切にする家庭で育ち「食」には特に興味を持っていたので、このコースはとても面白そうだと思い、参加を決めました。

現地には二週間滞在しました。神戸大学の卒業生で、タイでコーヒーを生産・販売する法人を設立した方がいて、その方がコーディネーターをしてくださいました。コーヒー農園で清掃活動を行ったり、焙煎の方法を教えてもらったり、農園があるアカ族という民族の村の小学校を見学したり。他にも、フリーズドライ食品の工場の見学にも行きました。どんなに設備をキレイにしても、そこで働く人がルールを守らなければ意味がなく、現地でどのように人材を教育し、食の安全・衛生を確保しているのかを学ぶことができ、とても勉強になりました。

このコースでの体験が、普通の旅行では絶対できないもので、本当に楽しかったので、これまでよりもっと海外に興味を持つようになりました。これから色々な機会を利用して、海外に行きたいと思っています。

フィールドワークチャレンジ(タイ) 谷口 茉奈 経営学部経営学科 3年

実際の現地での体験は、事前にイメージしていたものと違って、良い経験になりました。神戸大学基金等からの助成金の補助もあるため、コースにもよりますが、費用はそれほど心配しなくて大丈夫だと思います。もし迷っている方がいれば、思い切って参加してみることをお勧めします。

課題発見・解決型グローバル人材をめざす！

神戸グローバルチャレンジプログラム

Kobe global challenge program

神戸グローバルチャレンジプログラムは、1・2年生の1つのクォーターと長期休暇を「チャレンジターム」として設定し、学生が海外をフィールドに主体的な学修活動を行うプログラムです。先進的な取り組みを実施する大学を支援することを目的とした、平成27年度の文部科学省「大学教育再生加速プログラム（AP）」に採択されています。プログラム実施責任者の先生や履修生を取材し、プログラムの魅力や目指すところなどをお聞きしました。

神戸大学では、神戸大生が卒業時に身につけるべき3つの能力として、「複眼的に思考する能力」「多様性と地球的課題を理解する能力」「協働して実践する能力」を設定し、「神戸スタンダード」として定めています。

神戸グローバルチャレンジプログラムは、1・2年生の低学年の内に、海外をフィールドに主体的な学修活動を行うことで、学生に自らの体験に基づいて「神戸スタンダード」の必要性を実感してもらい、さらなる学びの動機づけを得てもらうことを、一つの目的としています。

プログラムは大きく、フィールドワーク型、インターンシップ型、サマースクール型、ボランティア型、学生企画型の5つに分けられます。それぞれに多様なコースが開講されていますが、例えばハンプルクでのフィールドワークコースでは、午前中はハンプルク大学の語学研修を受け、午後は学生が事前学修で立てた独創的なテーマ、例えば「ドイツの本屋ではどのようにして書籍が配布されるのか、その問題点や日本との違い」などを、徹底的に調べるといったものがあります。また、インターンシップコースの一つに、ミャンマーの日本語学校への派遣があります。ミャンマーで日本語を学ぶ学生のための辞書を、本学の学生とミャンマーの学生とが一緒に作って作成するなど、様々な活動を行っています。

もっと自由に課題を設定したい学生のために、学生企画型では、学生が大学教育研究推進室のコーディネーターと一緒に、派遣先や具体的な内容そのものを、一から練り上げていくということも可能です。

他にも、各学部でバラエティーに富んだ特色あるプログラムが用意されています。専門性の高いものもあり、学年が上がるにつれて必要とされる能力を1・2年生の内に直接体験できるものもあります。

また、プログラムに参加するにあたり、事前・事後学修があります。事前学修では参加目的を明確にするために、自身の現状の把握とプログラムでの目標を定める「チャレンジシート」を作成してもらいます。そして、事後学修では「リフレクションシート」を作成し、それらの達成度を振り返ります。評価方法も確立しており、そのような点でもしっかりとプログラムとなっていると思います。学修の成果は、総合教養科目「グローバルチャレンジ実習」として単位が授与されるというのも、大きな特徴です。コースを超えてお互いというプログラムだったかを共有する全体報告会も開催していますので、興味のある学生は是非そちらへも参加してもらいたいです。

海外で自ら課題を設定し解決していく中で、いろんな刺激を受けたり困難に直面したりすることで、どういった学びの姿勢を持つべきか、これから自分が何を身につけていくべきかということを、実感を持って考えることができます。

神戸グローバルチャレンジプログラムの各コースが提供している、まさに多彩な学外学修活動の機会を一人でも多くの学生が利用し、グローバル人材になるための、またその後の人生を築いていく上での、意味のあるきっかけにできればと願っています。

神戸グローバルチャレンジプログラム 国際的なフィールドでの多様な学外学修コース

1・2年生の1つのクォーターと長期休暇を「チャレンジターム」と設定

5つのタイプから選択

インターシップ型

フィールドワーク型

サマースクール型

ボランティア型

学生企画型

学びの効果

- 学びの動機づけ
- 主体的な学修の促進
- 英語運用力の向上
- 国際的なフィールドでのさらなる活動にチャレンジする精神を育成

■インタビュー学生広報チーム
工学部市民工学科 2年

伊藤 史佳

ITO Fumika



実施責任者

学長補佐(グローバル教育担当)
国際文化学研究所 教授

阪野 智一

SAKANO Tomokazu



だから、当時感じたことと、現在していることが一致していて、仕事に対する納得感や大きな使命感を感じています。

—— お仕事のやりがいを感じるのはどんな時ですか。

お客様からお聞きした通りの設計を行うだけでなく、お客様が言葉にできていない潜在的な要望を汲み取って、ちょっとした仕掛けを作ることがあります。お客様の様子を見て、喜んでいただけるようなアイデアを考えておくんです。そうすると、お伝えしたときに、わっと驚いて喜んでくださったり。それで、「ここに決めた」とか「あなたの図面で家を建ててください」と言ってもらえるのは、仕事をしていたとても気持ちがいい瞬間です。

また、家が完成した時のお客様の笑顔だったり、建てて数年後に訪問した時に、自分が思い描いていた通りの暮らしをしてくださっているのを見るのも嬉しいですね。時には、設計時には全く想定していなかった使い方をされていて、なるほど、こういう暮らし方もあるんだと発見したり。嬉しい場面はたくさんあります。

—— 学生時代はどのように過ごしていましたか。

軽音楽部に入っていたので、よく学生会館で練習していましたね。あと、アルバイトもよくやっていました。今、財産になっていると感じるのは、喫茶店のアルバイトでお客様対応を身につけられたこと。何かトラブルがあつたら自力で解決しないといけないし、注文をメモに控えずに全て覚えないといけない

せんでした。それがお一人でもグループでも家族連れでもです。間違えたら色んな人に迷惑がかかるので、必死でした。この経験で接客能力と瞬発力が身についたかなと思います。住宅メーカーの設計は、図面を書くだけではなく、お客様への対応能力が求められる仕事。このアルバイトと震災の経験が、特に今の仕事に通じているなと感じますね。

—— 仕事をする上で大切にしていること、モットーは？

まずは社訓にもある、「正義をきちんと実行する」ということです。トラブルがあつた時には、何が正義を実行することになるのかを考えて行動しています。

あとは、僕の座右の銘である「人間万事塞翁が馬」。簡単に言うと「成るようになる」というような意味ですが、悪いことが続いて心が折れそうになった時も、なんとかなると信じていればある程度うまくいくと思っています。日々トラブルで苦しんでいるメンバーには、「抱え込みすぎてもいいことはない、楽になる時は必ず来るから逃げずに頑張れ」と言っています。「成るようになる」と「逃げていい」は全く意味が違います。正義を実行しようと思つたら逃げてはいけませんからね。

—— 今後の目標や夢は。

設計課長として、メンバーが幸せに働き、生活できるような管理・統括をしていきたいです。成果を出しながら疲弊しない集団を作っていきたいと思っています。今は働き方改革が叫ばれています、そういった変化のなかで、家庭が充実させられるような働き方



■インタビュー
学生広報チーム
杉岡 祐依
SUGIOKA Yui
経済学部 経済学科 3年

を仕組みとして構築する、そんな役割を果たしていきたいですね。

また、今後も前線でお客様と関わりたいですし、お客様ときちんと向き合えるメンバーを育てていきたいです。部下の成長を見るのが、今はとても楽しみです。

—— 神大生にメッセージをお願いします。

自分が今、そして将来どんなことをやりたいのか、学生のうちに真剣に考えることが大事だと思っています。そして、何か一つ自分の武器になるものを見つけて欲しいですね。苦手なものを克服するよりも、特技や長所を伸ばしていった方が断然武器になると思います。もちろん学問も大切ですが、アルバイトなどの経験が武器になることもありますので、ぜひいろいろな社会経験も積んでください。



水谷 英二 MIZUTANI Eiji
岐阜県生まれ。一級建築士。1996年神戸大学工学部建築学科卒。
1996年に旭化成ホームズ入社。多数の支店勤務を経て、2015年より現職。

—— 今はどうなお仕事をされていますか。

建築士として、お客様のご要望をお伺いしながら住宅の設計を行っています。また、課長でもあるので、現在は課のメンバーの仕事のマネジメントを中心に業務を行っています。

—— 建築士になろうと思ったきっかけは？

神戸大学の建築学科へは、家族の勧めがあつたり、関西への憧れがあつたりで、それほど確固たる思いがあつて進学した訳ではありませんでした。

きっかけとして決定的だったのは、僕が大学3年生の時に経験した阪神・淡路大震災。この震災の時、下宿先のアパートが一瞬で崩れ、僕は瓦礫に埋もれているところを、近所の人に助けてもらって生き延びることができました。全身ボロボロであたりを見回すと、道路に倒れている人がいたり、あちこちに火が回っていたり。僕が住んでいた東灘区では、崩れてしまった家がたくさんありました。そんな中、ちゃんが残っている家もあることがとても印象的だったんです。建築学科

に身を置く学生として、その違いは何なのかと疑問を持ちました。

震災時、家の中にいたのに、家が崩れて命を落としてしまった人がいた。でも、崩れないうちに家の中にいて、助かった人もいた。どういう家に住んでいたかで、結果が違つてしまった。この経験が今、何かあつた時に「家にさえいたら安心です」と言える住宅を手掛けていきたいという思いにつながっています。

ご縁があつて、旭化成ホームズで働くことになりましたが、ヘーベルハウスは、堅牢で安全・安心という評価をいただいています。



「安心安全な家を」震災からの決意

高い断熱性や耐火性、遮音性など優れた特徴を持つ外壁材「ヘーベル」を使い、「ヘーベルハウス」「ヘーベルメゾン」のブランドで住宅事業を展開している旭化成ホームズ。その関西営業本部神戸支店の設計課長であり、一級建築士として日々業務を行っているのが水谷英二さんです。顧客との関わりを大切に、その要望一つ一つと向き合いながら設計を行っている水谷さん。学生時代の経験が、今とつながっていました。

勉強以外では、 普段どんなことをしていますか？

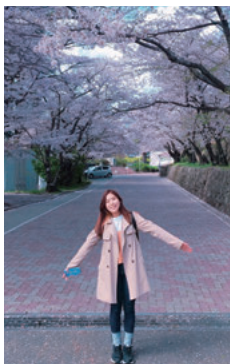
家の近所にコーヒー豆屋さんがあるので、そこによく通っていたら、お店の人やお客さんと仲良くなりました。年齢もバラバラなのですが、そのメンバーで一緒にお茶したりすることがよくあります。学部友達とご飯を食べにいたり、同じ韓国の留学生と集まって遊びに行ったりもしますね。それと、最近k-popダンスに挑戦しています。まだ初心者なのですが、続けていきたいなと思っています。

将来の夢について教えてください。

やっぱり研究がしたいですね。幅広く勉強しているうちに、興味のある分野が増えたので、どの分野にするかはまだ迷っていますが、研究者になりたいと思っています。4年生になって研究室に入ってみて、興味とピッタリ合えば、そのまま神戸大学の大学院へ進学したいですし、他の大学でも、いいと思えるところがあれば考えたいです。

学内のお気に入りの場所は？

百年記念館はすごく好きですね。景色がとてもきれいで、よくお弁当を食べたりしていました。それから、農学部近くの桜はとてもキレイでした。神戸大学は自然が豊かで、キャンパスの中で散歩ができて、いいなと思います。



今はどんな勉強をしていますか？

学部生なので、幅広い範囲を一通り勉強しています。私はもともと行動学に興味があって、行動と脳の働きに関連について学びたいと思っていました。興味のある分野が狭かったので、生物学科で勉強する範囲がとても広く、あまり興味のなかったこともたくさん勉強する必要があったので、1・2年生の頃はかなり大変でした。でも、それまで知らなかった面白い分野を見つけることもできたり、3年生になって、神経行動学などの興味のあった分野の授業を受けられるようになってきたので、これから楽しみです。

神戸大学に来て驚いたことはありますか？

韓国の大学は、賑やかな町の中にあることが多いので、神戸大学の自然豊かな立地には驚きました。静かで空気もいいし、勉強や研究に集中できて良いと思います。でも、もう少し、学食や図書館以外にも、気楽に行ける場所が近くがあればいいなとも思いました(笑)。



日本で生物学を学び、 研究者を目指す

今回は、お隣の国・韓国からの留学生。理学部生物学科の学部生で、日本語がとっても上手なソンファさんに、韓国と日本の違いや、神戸大学に来て驚いたこと、将来の夢などをお聞きしました。

안녕하세요!

日本と韓国のどういう所に 違いを感じますか？

食べ物だと、やっぱり日本は辛い料理が少ないと思います。例えば日本のコンビニなどで売っているものは、「辛い」と書いてあっても辛くなかったりします。夏休みなどに韓国に帰ると、辛い料理が多いと改めて思います。

あと、日本のカフェの文化にも驚きました。韓国でカフェというと、ドトールみたいに、ドリンクがメインで、ケーキやサンドイッチが置いてあるくらいなのですが、日本だと、パスタやランチなどの、しっかりとした食べ物も出しているカフェが多いです。最初、そういうお店をカフェだと思わなくて、日本はカフェが少ないなと思っていました(笑)。韓国では、お昼ごはんをカフェで食べるというのは不思議に思います。

そういう違いから来たのかなと思うのですが、韓国ではよく、カフェで1、2時間くらいコーヒーを飲みながら勉強したりします。大学の近くにはカフェが多いので、みんなよく使っているのですが、日本だと、あまりそういうことができないですね。町の中で勉強できる場所がないのは、ちょっと困ったりもします。

神戸大学に来ようと思ったきっかけは？

日本に留学しようと思ったのは、日本が自然科学に強いからというのと、以前に脳科学を研究されている東京大学の池谷裕二先生の本を読んだことがあって、自分も研究者になりたいと思ったからです。

私は、韓国の学生100人を日本の国立大学に留学させるというプログラムに参加しているのですが、自分の成績で選択できる大学の中で、神戸大学の生物学科のカリキュラムが一番やりたいことと近いかなと思って志望しました。

日本語がとても上手ですが、 どうやって勉強されましたか？

日本のドラマが好きで、ひらがなやカタカナは中学生のときに初めて覚えました。その後は高校の第二外国語として日本語を選んだのですが、簡単な挨拶くらいしかできませんでした。参加した留学プログラムで、6ヶ月間韓国の大学での日本語の予備プログラムがあって、朝から夜まで、集中的に勉強しましたね。その後、大学に来ても、さらに6カ月の日本語プログラムがありました。なので、1年くらいかなり集中して勉強しました。

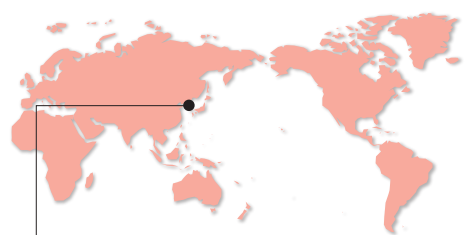
こんにちは！ 留学生です

世界各国から来た約1200人の留学生が神戸大学で学んでいます。このコーナーでは、母国の文化や習慣などの話を交えながら、国境を越えて頑張っている留学生にスポットを当てます。



ガン ソンファ GANG Sunhwa

理学部 生物学科 3年
韓国出身。2015年4月、神戸大学に入学。最近、友人と「気のせい」という日本語を使うのが流行った。



韓国(大韓民国)

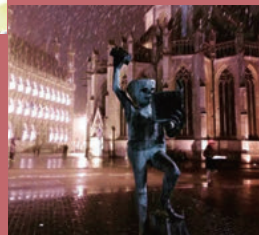
朝鮮半島南部の共和制国家で、人口は約5100万人。首都はソウル。ドラマや映画、音楽が世界的に人気で、日本からの旅行者も多い。



現地の友人とビール(右手前が本人)

首藤 ゆい SHUTO Yui
経済学部 経済学科 4年

ルーヴェンのシンボリックな銅像
(ビールを浴びながら勉強する学生の像)



留学だより

ベルギーのルーヴェン・カトリック大学へ交換留学

私は3年次後期から4年次前期にかけてベルギーのルーヴェン・カトリック大学へ交換留学しています。ルーヴェンは「学生とビールの都」とも呼ばれ、ビール醸造の中心地でもあります。この土地柄を生かし、大学公式の留学生歓迎イベントでパブクローが開催されたことは驚きでした。これは、ビールバーをハシゴしながら親睦を深めようというもの。初めは欧州の学生の飲みっぷり、はじけっぷりに圧倒されましたが、気の合う仲間ができた今では、このベルギーの学生らしい放課後の過ごし方を楽しんでいます。

留学は高校時代からの一つの目標でした。大学入学後は、経済学を学び、各国間で起きている現象の理解のため、ヨーロッパ型資本主義を推進する経済学や経営学を学びたい、日本と欧州の相違点や共通点を肌で感じたいという思いから、この大学を留学先に選びました。今は専門分野の授業の他、欧州統合の歴史やブランドマネージメントなど、日本では学べなかった分野の授業も履修しています。

授業中に飛び交う質問や学生の会話から、新しい考え方やものの見方に気づかれます。周りに流されず、自分の意見を主張できる学生たちと過ごし、改めて自分と向き合ってきた。留学は準備期間がとても重要で、興味のある方は、是非早めから準備を始めてください。



「Table For Two 神戸大学プロジェクト」メンバー



「六甲祭」出店風景



開発途上国の子供たちに給食を 世界を繋ぐヘルシーメニュー

「TFTメニュー」と聞いて、ピンとくる学生も少なくはないはず。年に2回、期間限定で本学食堂に現れる評判のメニューだ。代金の一部は開発途上国に住む子供たちの給食提供に活用されている。この仕組みの導入を大学生協に提案したのは「Table For Two 神戸大学プロジェクト (TFTKP)」。

代表のお2人に、活動内容や今後の展開などを伺った。

世界では人口約70億人のうち、約10億人が飢餓や栄養失調に苦しんでいる。一方、食べ過ぎが原因で肥満状態にある人は約20億人。この食の不均衡を解消するため、2007年に日本から始まった運動が「TABLE FOR TWO (TFT)」だ。独自の寄付金の仕組みは、アメリカやスイスなどの先進国14か国に広がり、日本においても多くの企業・団体・学生が参加している。TFTKPもその一員だ。

——まずはTFTの仕組みや意義について教えてください。

浅井 TFTは、先進国において、寄付金の対象となる料理や食品を購入すると、その代金のうち原則として20円が開発途上国に贈られる仕組みです。20円というのは、開発途上国の給食1食分の金額。対象メニューのカロリーや栄養バランスには規定があり、先進国の人はこのヘルシーな食事を1回摂るごとに、開発途上国の子供たちに給食1食分を贈ることができます。つまり、開発途上国の飢餓と先進国の肥満や生活習慣病の解消に同時に取り組むことができるんです。



開発途上国には「なくてはならないモノ」が十分でない状態。その現状に多くの人が目を向けるきっかけになればと思います。将来は、開発途上国への貢献に繋がるビジネスに挑戦したいです。

Table For Two 神戸大学プロジェクト 代表

浅井 美名 ASAI Mina
経営学部 経営学科 3年

渡邊 2015年末時点でTFTに取り組む企業・団体は647。学生団体「TFT-UA (TFT-University Association)」には、私たちを含むさまざまな大学の学生が参加しています。開発途上国では貧しい家庭の子供が働き、学校に通えないことも…。給食を目的に学校へ通うことができれば、教育を受けて貧困から脱却するための足がかりになると考えています。

——TFTKPは主にどういった活動を？

浅井 6年前、神戸の飲食店にTFTを提案したのが始まりです。その後、大学生協にも企画提案し、本学食堂で私たちが考案した「TFTメニュー」を提供していた

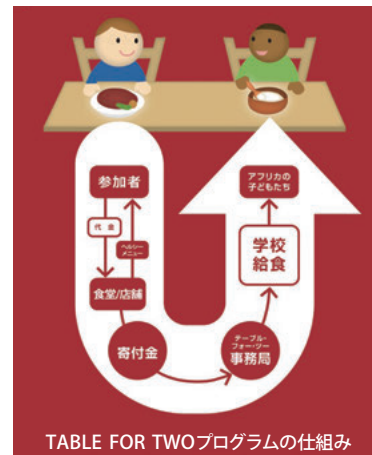


TABLE FOR TWOプログラムの仕組み

ニュー同等の食べ応えのあるメニューにすることがポイント。例えば、お肉を使うけれど、安くてヘルシーな鶏肉を選ぶなど工夫しています。食堂の方に過去の売上食数を教えていただいたり、意見をいただきながら毎回新しいメニューを考えています。

渡邊 今回は私が考案した「三色丼」も採用されています。自分が考えたメニューが寄付金に繋がると思うと嬉しいですね。大学生協のTFTメニューは1食につき10円が寄付されます。TFTKPでは、提供する場の価格設定に合わせて寄付金を臨機応変に設定しています。

——実際に食べてくれた学生の反応は？

浅井 「TFTメニューはいつも美味しい」と言ってくださる方が多いです。ありがたいことに、そういう認識が広まっているみたいですね。食堂でTFTメニューを注文している人を見かけると「おつ」と思います(笑)。

渡邊 学園祭では私たちが作った「お魅ラスク」などのヘルシースイーツを販売しており、それも毎年好評です。こちらは1食につき5円が寄付金になります。今年は何

Table For Two 神戸大学プロジェクト 代表

渡邊 みのり WATANABE Minori
農学部 生命機能科学科 3年

中学生の頃からボランティア活動にはよく参加していました。最近は開発途上国の子供たちに関わる活動がしたいと思うようになり、徐々に自身の将来の進路が絞れてきたように感じています。



左:ピビンバうどん 上:三色丼 下:鶏と野菜のピネガー煮

だけでなくになりました。今もこの2本柱で活動しています。

渡邊 神戸の飲食店からは「TFTを取り入りたい」とお問い合わせをいただくことが多いです。訪問して、お店が提示したメニューがTFTに適しているかどうかを確認し、良ければお客様に提供。1食につき20円の寄付金は私たちがお預かりし、TFTに納めています。食事メニューに限らず「和紅茶」を提

を販売できるか、今から楽しみです。

——今後の課題はありますか？

浅井 TFTメニューが好評なのは嬉しいのですが、TFTの意義自体はあまり浸透していないように感じます。現在、食堂のTFTメニューは2週間で7000食程は食べていただけています。ですが同時に「TFTって何?」「知らない」という会話もよく聞きます。理想は、いつものカツ丼かTFTメニューの三色丼かで迷った時「開発途上国の子供たちの給食に繋がるから、三色丼にしよう」と選択していただくこと。それくらいTFTの意義を浸透させることが課題です。

渡邊 世間の方々に向け、TFTの活動情報をSNSで拡散することもあります。

——具体的にどのように展開しますか？

渡邊 学生がTFTメニューを目にする機会を増やすために、本学周辺の飲食店や、大学生協が販売しているお弁当など、学内外問わず、TFTの提案先を広げていきます。飲食店へのレシピ提案もしていきたいですね。他大学のTFTUAとも、合宿やミーティングなど連携を取りながら、互いの活動に活かしていますよ。

浅井 他にも、年間を通して意識を向けていただけるよう広報班を作って、新たな周知活動にも力を入れていきたいです。メンバーで意見を出し合いながら、今後はより積極的に取り組んでいきます。

初の学生プロデュース! 入学式で新入生歓迎企画を実施しました

神戸大学は4月4日、神戸ポートアイランドホール(ワールド記念ホール)にて、平成29年度の入学式を挙行了しました。今年度は、10の学部と15の大学院などを合わせて、4,453人が入学しました。

今年は初めての試みとして、在学生による新入生歓迎企画を行いました。六甲台学生評議会(ベルカン)の学生の司会のもと、ネスレ日本株式会社代表取締役社長兼CEOの

高岡浩三氏(昭和58年経営学部卒)による記念講演があり、続けて、学生3名と高岡氏が、「志」の大切さなど様々なテーマについて、ディスカッションを行いました。

会場では、この日のために学生がデザインした「神戸大学入学式キットカット」が配られ、新入生がパッケージにそれぞれの志を書き込み、4年間の学生生活を充実したものにする事を誓い合いました。



神戸大学プロフェッショナル

学生のキャリア形成を手厚くサポート

学務部キャリア支援課キャリア支援グループ職員 **大籠 涼** OGOMORI Ryo

主に、窓口で学生の就職に関する相談や、インターンシップの情報提供・書類作成の支援、キャリア関連図書の貸出等を行っています。3年生の夏頃からインターンシップが始まりますが、企業からの募集も学生からのニーズも高いので、いかにうまく学生に情報を提供するか苦心します。また、神戸大学では、同窓会や大学生協等の就活支援組織もあるので、それらとしっかり連携していくことも大切にしています。

窓口で対応した学生が、内々定をもらって報告に来てくれたりすると、やはり嬉しいですね。学生が自分らしいキャリアを形成していくサポートができるよう、これからも幅広い業務を経験していければと思っています。



神戸大学サイトトップページ → 右バナー
「学部・大学院 その他施設」 → 「キャリアセンター」
<http://www.career.kobe-u.ac.jp>



読者の皆様へアンケートのお願い

神戸大学広報誌『風』9号をお読みになったの感想をお聞かせください。今後の誌面作りの参考にさせていただきます。

1. どの記事に関心を持たれましたか 2. その記事についてどのような感想を持たれましたか 3. 今後読みたい記事 4. その他何でもご感想を

アンケートの回答は神戸大学広報課のメールアドレスをお願いします。

✉ ppr-kouhoushitsu@office.kobe-u.ac.jp
※ご職業、年齢を書き添えていただくと幸いです。

WEBフォームもありますので
今すぐアクセス!



日々情報更新中!



神戸大学公式 Twitter
「@KobeU_PR」



神戸大学公式 Facebook
「神戸大学 _ Kobe University」



「フォロー」「いいね!」
お願いします。

インドネシアで

Kobe University Academic Research and Education Forum(KUAREF)を開催

http://www.kobe-u.ac.jp/NEWS/info/2017_01_17_01.html

神戸大学は、2016年12月21日及び23日にKobe University Academic Research and Education Forum (KUAREF) in Indonesiaを開催しました。神戸大学は2011年から2015年まで、海外同窓会ネットワークと連携し神戸大学のブランドを世界に発信することを目的として、KOBELINK GLOBAL LINK FORUM (KUGL) をアジア各国で開催してきました。2016年から、KUAREFと名称を変更し、教育研究を前面に出したよりアカデミックな行事として、学術シンポジウムを開催することとなりました。

神戸大学では、医学研究科及び保健学研究科において、インドネシア・アイルランガ大学に新興・再興感染症共同研究拠点

を設置し、感染症対策を含む医学・保健学分野の問題解決に貢献する人材の養成を目的にしたプロジェクトを実施してきました。21日には、プロジェクトのコンソーシアム校であるガジャマダ大学と共催し、保健衛生、災害、ジェンダーを軸に、学術報告が行われました。23日には、学術交流協定校であるインドネシア大学と共催し、人文・社会科学の比較研究とエネルギー及び環境に関する課題解決のための膜技術についての最先端の研究成果が報告されました。

シンポジウム終了後は神戸大学インドネシア同窓会が開催され、インドネシアの協定校との連携及び海外同窓会ネットワークとの協力を強化する機会となりました。



12月23日に行われたKUAREF

同窓会・校友会・育友会 アラムナイ

校友会の会長就任にあたって 変わりゆく神戸大学と校友会

原 俊雄 HARA Toshio (昭和48年理学部卒)



社会の変遷と共に、そして社会の期待と文部科学省の要求によって、神戸大学は大きく変わり始めています。その一つに、国際文化学部と発達科学部を改組して新たに創設した国際人間科学部があります。今年4月に第一期生が入学してまいりました。世間で叫ばれている「グローバル人材育成」という役回りを担った新学部です。学生には、フィールドワーク

と最短1週間から最長1年間の海外研修が必修プログラムとして課されます。数年後には、世界的視野を持った人材を社会に送り出すことが期待されます。しかし、海外研修の費用は学生の自己負担です。費用問題を含めて、国際人間科学部の教育研究を推進するにあたっては、神戸大学人の力量が問われます。現在、校友会の財政は大変厳しいです。その中で、同窓生の皆様のご協力を得て、校友会は神戸大学に物心両面のできる限りの協力と支援を行って参ります。皆様のご理解とご協力を、よろしくお願い申し上げます。



日本に甚大な被害をもたらすかもしれない火山噴火。その予測を試みる「鬼界カルデラプロジェクト」を特集しました。このような大きな災害の可能性があることを受けて、今後どうすべきなのか。それを国民一人ひとりが考えて欲しい。様々な思いを胸に活躍する神大人を紹介する「風」。今号も盛りだくさんの内容となりました。

(広報課)

風 Jul.2017
Vol.09

発行日／2017年7月

編集・発行／神戸大学総務部広報課

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1

TEL／078-8003-5083

FAX／078-8003-5088

アートディレクション・デザイン／有限会社ヲクリエーション

印刷／能登印刷株式会社

©2017 神戸大学

※本誌に掲載されている記事、写真、図表の無断転載を禁じます。